せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 ☎42-2590
第140号・平成13年5月1日

年表で読む 古平の歴史

《47》

イカ釣り漁

春ニシンが終わる五月末ごろになると建網にイカがかかるようになるが、このころのイカはするめに製造するには身が薄く、生食用のほか、貯蔵用として塩辛がつくられていました。

七月初旬からはスルメイカが獲れ始め、八月が最盛期でした。するめは煎海鼠(いりこ)・干アワビ・コンブなどと同様に、長崎俵物(たわらもの)として昔から大事な製品でしたが、古平のそのころの記録はありません。

古平ではだいぶのちの明治三年ころから、越後(新潟)や佐渡方面からの移住者たちが沖合い四、五キロのところで釣るようになり、少しの経験があれば容易に釣ることができました。イカ漁は水温や潮流などの関係から年によって豊凶の差が大きかったが、家族全員が参加して収入を得ることができたし、また、一般の人たちの中にもイカを買ってするめを製造・販売する人も出てきました。イカの漁獲高も次第に増えてきて町の重要な産物となりました。

明治四五年のイカ漁の状況は次ぎのようでした。

(五反～三反型は川崎船)

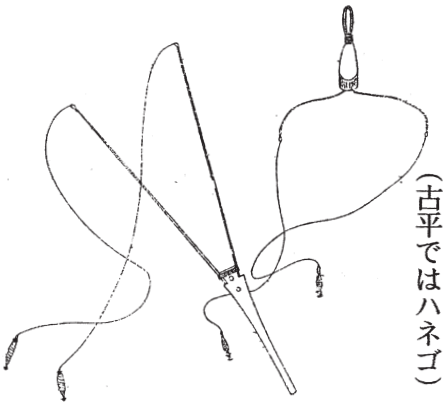
五反型	一〇人乗り	二三隻
四反型	七人乗り	一〇隻
三反型	四人乗り	一二隻
磯　舟	一人乗り	一〇隻
持符船	三人乗り	六隻
合　計	三七六人	六一隻

漁期七月一〇日～九月一〇日

この外、ニシン網やコオナゴ網、大謀網などでヤリイカが大量に獲れたとあります。

イカ釣りの漁具

① トンボ
② ハネグ
(古平ではハネゴ)



トンボの針
(擬似餌に水牛の角など)

ハネグの針
(イカを巻きつける)

するめは二〇枚を一把とし、五把(一五〇〇枚)を一梱(こり)としていました。

同年のイカの製造数量

するめ	二九．一八九貫	
	二六．〇〇五円	
塩　辛	五〇樽	二二五円
自家用	四三貫	三〇円

大正二年は盛漁期に雨が続き、するめを製造することができなかったので、イカを塩漬けにして秋田方面へ送る者もいました。同六年はイカが大漁で四万七千貫余りの漁獲があり、価格も六千六百余円となりましたが、一〇年はコレラが流行したため値段が大きく下落しました。しかし、一四年には九万五千貫(約三六〇トン)の漁獲があり、価格も二万八千五百円とこれまでの最高を記録しました。

古平周辺に限らず、北海道ではイカ釣りのことをイカつけと言ってるようですが、灯火に誘われ擬似餌に寄って来たイカを引っ掛けるので、確かに釣るという感じとは違うようにも思われます。しかし、どうしてイカ釣りだけイカつけというのかはわかりません。

大正八年

浜の世相を見る

高野名幸作さんの日記から

【41】

4／13　浜へ出て見ると、昨日打ち上げられた安全丸は見る影もなく、破損して浜に上がっていた、人夫がそれらの残骸を集めている、また、枠から流れ出た鰊が沢山岸に寄って来ていて、それを拾う人が何百人も浜に出ていて大賑やかである、家でも拾いに行って、二時間で五モッコも拾って来た、今回の時化で、思いがけなくロープ、アバ縄が多く出た。

4／14　鰊割きの出面がいないというので皆困っている。新聞によれば、昨日の時化では各地で大損害を受けたという、古平はまだ軽い方であったようだ、四月十一日までの漁獲高

島牧三〇〇石、　岩内三万石
寿都八五〇石、　古宇四万石
積丹二万八千石、高島一万石
美国三万二千石、浜益二万石
古平二万五千石、小樽二千石
忍路一万八千石、
余市二万九千石、

4／16　群来村本漁場で一枠とったというので、大漁手ぬぐいが出る、丸山岬から群来村方面が大漁で十二杯から一枠、歌棄、沖村方面が七～八杯、今日は天気も良く、ナギで絶好の沖揚げ日和だ、今日の水揚げ四千石、累計で三万石。

4／17　入船町種田幸右衛門さんから、夜十時ころ、枠四つもとったのでロープ大至急入用との電話がある、すぐ届けたが、二一〇円余り現金で入る、何と景気の良いことだ、漁具類はいつ注文があるのかわからぬので、三、四月中は品数も十分に仕入れておかねばならない。

4／18　今日も大漁だ、銀行へ行ったついでに入船町を廻ったが、イ、八、中、キ、種金など、みな大漁手ぬぐいを出していた、刺網も大漁、タラ釣りも漁が良く、どこも景気が良く喜ばしいことだ。今日の漁獲高三千石。

4／19　快晴である、沢江、歌棄、沖村方面で漁があった、五～六杯ぐらいはとれ、全部で二千石はあろう、出面も引っ張りだこで、相当量の鰊を貰ったようだ、夕方から雨になる、北海道庁長官に岡山県知事の笠井信一が任命された。

4／20　漁はない、豊国丸と古英丸が枠を引いている、刺網は大々漁だったが、網の流失などもあり、今年は大いに網の売れ行きは見込みがある、六月ころからそろそろ活動しなければならない、家でも鰊つぶしに忙しい。

4／22　沢江付近で、五～六杯とれた、丸山岬で八、本陣歩方、種金ほかも一五～一六杯群来村本も一〇杯ほど、今日までの累計は四万石ぐらい、近年にない大漁だ。

4／24　昨日はダシ風が激しく、漁は無かったが、今日は丸山岬、歌棄山中で五～六杯とれた、刺網は一部良かったようだがあとは少々、今日は七～八〇〇石、風が寒く、アラレが降ってきた。

4／25　あちこちで二～三杯ぐらいとれたとのこと、四月初めから鰊漁が切れない、刺網はさっぱり掛からない、前から計画していた金物類の販売も、景気がいいので来月仕入れに小樽へ行き、開店の準備をしなければならない。

4／28　鰊漁はなく、いよいよ終漁だろう、今年はどこも大漁しているのでこぼす親方もいない、刺網、手間取りは近年にない大漁で実入りも良いようだ、もう鰊の納屋下ろしをしたところもあり、これからは鰊製品の値段にかかっている、累計で四万三千石ぐらいという。

4／30　刺網はもうポツポツ後始末をするところもある、二九日、横浜で大火があり三千余戸が焼失したという、恐ろしいことだ。

（次号へ続く）

北海道・樺太・千島を探険
最上徳内 蝦夷草紙 を読んでみましょう

10

神事のこと

松前では正月になると、神社や家々で神楽（かぐら）を行う。神明宮の宮司が近在の者たちを集め、装束を整え、まず領主の表門から玄関に通りそこで獅子舞を舞う。それが終わると家中の武士の家を廻り獅子舞を舞う。また、町家にも廻り獅子舞を舞うが、町家ではこれを崇拝し新年のおめでたい行事としている。

また、八幡宮は領主の祈願所として、毎朝、神楽がある。八月十六日には祭礼があり、小松前の橋を境にして南北の町が二手に分かれ、南は飾り立てた船を引かせ、北は山車を引かせ、南北ともに子どもに狂言を演じさせ、負けず劣らずと美を競い合う。

ほかに正月には上野国（上ノ国）にある八幡宮と目名の毘沙門（びしやもん）へは領主の代参がある。

盆踊りには、十五歳以上の者は踊るようにとのお触れがあり、老若男女が群集して夜遅くまで踊り見物する。十四日から二十一日まで毎夜踊りがあり、これにより町中が大いに賑わうのである。

【注】　神明宮 ＝ 新明町にあるのでこの名があるが、伊勢神宮の神爾を受けて祀っている。

八幡宮＝以前は大館に祀られていたが、新しい社殿を松前に造営し、松前の氏神として多くの人の信仰を集め、大神宮と共に二社と称された。

上ノ国八幡宮 ＝ 松前家の先祖が上ノ国の館に館神として建てたものを改造した。

目名毘沙門＝目名は上ノ国の北にあり、この本尊は海中から引き上げたという金像の毘沙門で、後、火災に遭い、本尊もまた紛失したが翌年再建された。

蝦夷の島の形のこと

松前のあるこの島は周囲がおよそ八百里（三千キロ余り）、海岸には蝦夷人が多く住んでいるので通ることができるが、内陸は山岳の高低、原野の広狭、河川の様子などは全く分かっていない。

この蝦夷地の西北に当たるソウヤ（宗谷）の北にカラフト（樺太＝サハリン）という島がある。住んでいるのは蝦夷で、その広いことは蝦夷地にも負けないというが、その形はトビの羽を広げたようだと蝦夷は言っているが、漠然としている。

また、この西にサンタン（山丹・山靼）という国があるが、そこに住むのは蝦夷人とは別の人種である。これから満州一帯へは地続きである。

蝦夷の東北の地メナシ（目梨）の向こうにはクナシリ（国後）、エトロフ（択捉）の二島がある。これから北は赤人の住んでいるカムサスカまで、多くの島々が馬の蹄（ひづめ）のように続いている。さらにこのカムサスカ（カムチャッカ）の北にはチョウキチという異国があるが、最近は赤人に従っている。カムサスカから西は、赤人の王城のある地まで一帯の地続きである。まだ詳しいことは分からないが、僅かに赤人の一人から聞いたことを記しておく。

【注】　カラフトの蝦夷 ＝ 樺太に住む原住民としては、ギリヤークとオロッコと南部に住む蝦夷と呼ばれる三つの人種がいた。樺太の蝦夷はその生活や習慣が北海道の蝦夷とよく似ていて、常に北海道蝦夷やギリヤーク・オロッコ、山丹人らと往来し交易をしていたので、日本との関係も深かった。

―古平いろはうた―

ら　鎮魂歌朝日を受けて立に建つ

真貝亮子さんの余市豆本『白鳥古丹』―詩人吉田一穂のふるさと―の中に、「父幸朔は長男の由雄に家業の漁業を継がせたかった。（略）父幸朔の願いとは逆に、由雄は好学心の旺盛な少年になっていった。読書の数は大へんなものだった。」とある。

近代の日本の詩の世界に大きな光りを放った一穂は、多感な少年期を過ごした古平をふるさととして懐かしみ、古平小学校九十周年記念誌に『白鳥古丹』と題して、ふるさとへの熱い思いを随想として載せている。

一穂は、戦時中はほとんど詩を作ることもなく、絵本の編集者として生涯たった一度の会社勤めをしながら、この時期に多くの童話を作った。

その戦時中に、戦没者の慰霊のため靖国神社に捧げたのがこの鎮魂歌で、細谷一郎が混声合唱曲に作曲したものが楽譜として出版された。

『鎮魂歌』は初め『たましづめのうた』として発表されたが、後に題名が変わり、漢字とかな混じりに改められた。

ある会合の席で、『鎮魂歌』を一穂の詩碑として、郷土の英霊が祀られている忠魂碑前に建てようということが、古平小学校同窓会から提案されたことから、これを受けて、鎮魂歌歌碑建設期成会が結成され、多くの町民からの寄進によって詩碑が完成した。

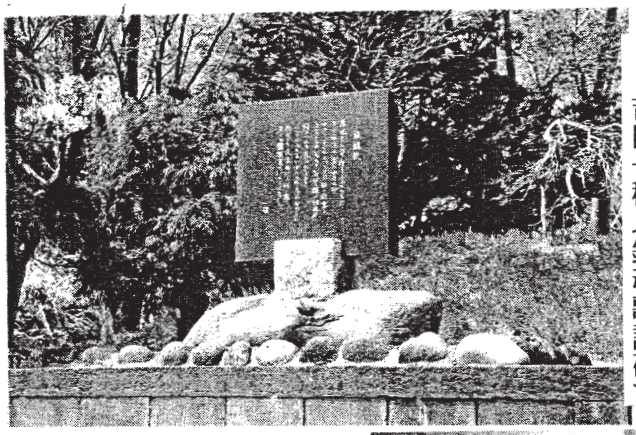
詩碑は、天然石の上に御影石を台にして碑面をはめ込んだもので、碑石の裏面には、日露戦争以来の郷土出身の戦没者二百七柱の氏名が刻され、奉祀されることになった。

この戦没者氏名を書いたのは、当時、古平町役場に勤務していた末政才治さんだが、完成間近になって一穂から、「戦死した弟もこの地に祀ってもらえないか」、という要望が伝えられたことから合祀することとし、この記名は石屋に任せたため一行だけ筆跡が違っている。

昭和四十一年八月二十四日、東京から一穂を招き、関係者や遺族ら二百余名が参列して、琴平神社山口文男宮司と遺児により除幕が行われ、小樽混声合唱団による『鎮魂歌』の混声四部合唱が録音により披露された。

なお、当日は除幕式を兼ねて戦没者慰霊祭も行われ、遺族には、古平町から記念品として一穂直筆の短冊が贈られた。

野につみて花はむらさき
（鎮魂歌の中の一行）



琴平神社境内に建つ
吉田一穂〈鎮魂歌詩碑〉

〈同窓会での記念写真〉中央で横を向いているのが一穂、校旗は一穂のデザインしたもの

抜け出したそば喰い地蔵の願雄寺

―そば喰い地蔵伝説―

今日も、的場のじいさんはそばを作っていた。そば屋を開いてからは、ここを通る人はみな寄って食べるのだった。いつの間にか評判になり、店は大繁盛だった。じいさんはみんなに喜んでもらいこんなうれしいことはないと、顔をほころばせるのだった。

ある日のこと、いつになく人通りが少なく、寄ってそばを食べる人も少ないので店を早く閉め、炉端でわらじを編んでいた。

そのころ、沢江村に地蔵堂があって、地蔵さんが祀られていた。ここにはいつも供物があり、土地の人たちからあがめられていた。次の日の朝、的場のじいさんが、夜なべ仕事で作ったわらじを外に掛けようと入口の戸を開けると、そこにあの地蔵さんが立っていた。

じいさんはびっくりして、家に入るとばあさんに、「これは一体どうしたことじゃ、地蔵さんが家の前に立っている。ちょっと外に出て見ろ」と言った。

薬師堂に安置されている伝説の〈そば喰い地蔵〉―中央―

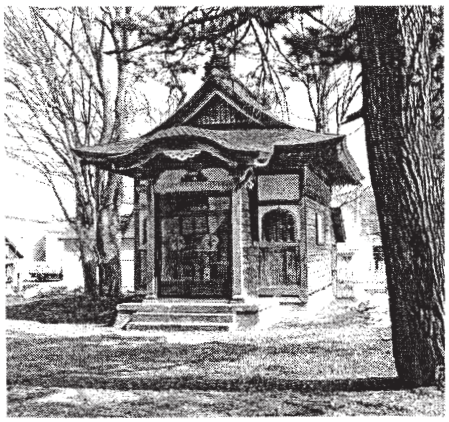
ばあさんがそっとのぞいて見ると、話のとおりちゃんと立っていた。

ここを通る人は、みなあの＊渡船に乗って来るのに、地蔵さんはどうしてあの川を渡って来たんだろうと思うと、不思議でならなかった。

じいさんとばあさんは、「そうだ、きっとこの的場のそばがうまいと聞いて、夜、そっと川を渡って来たに違いない。本当にありがたいことだ。これをこのままにしておくわけにはいかない。」と、地蔵さんを元の場所に戻し、そばを供えて供養した。そんなことがあってから、誰言うとなくその地蔵さんを『そば喰い地蔵』と呼ぶようになったという。

その後、願雄寺を創建した石上皆応が、沢江村にあった地蔵堂を本堂の脇に移設し、地蔵さんも移したが、『そば喰い地蔵』の伝説と共に多くの人から信仰を受けるようになり、毎年七月二十三日にはそばを供えて供養するようになった。

（願雄寺印刷物より）



本堂に向かい右側に建つ薬師堂

小樽周辺に浄土宗の寺や念仏道場が建立されると、それが古平・美国方面への布教活動を盛んにした。東京の浄土宗務所から、この方面に新たに寺院を建立することを発令された石上皆応は、明治二十一年に本堂を建て、願雄寺の創建を祝って盛大に慶讃会（きょうさん＝堂塔などの完成を祝う仏事）が行われた。

当時、町内には禅源寺・宝海寺があったが、浄土宗信者からの寄進や、特に沢江村の財力のある漁業家の支援を受け、創立認可から六年の歳月を経て書院・庫裏の完成を見た。※

人に喜ばれ 自分も嬉しかったこと

竹内　コト

昭和四十四、五年ころのことだったと思います。当時はすけそ漁が盛んで、特に新地方面は活気に溢れていました。

そのころ、今のつばめハイヤーの隣に大西さんという家があって、私も仕事柄よく大西さんに寄っては懇意にしておりました。広い玄関でしたが、そこにはいつもリンゴの箱が沢山積んでありました。何でも余市のリンゴ屋さんに場所を貸しているとのことでした。

私も保険の仕事を持っているので、五人の子どもは姑さんに預けてセールスに歩いていました。朝は早く、帰りの遅いこともあって、子どもたちのおやつ代わりにリンゴを買ったりしている中に、そのリンゴ屋の奥さんが養老保険に入ってくれることになりました。

その後、リンゴ屋の奥さんとしばらく会わないなぁ、と思っておりましたら、ある日、事務所に男の人が一人訪ねて来ました。余市の役場に勤めている武田さんという方でした。

話によると少し前、リンゴ屋の奥さんが風呂に入っていて心筋梗塞で亡くなったというのです。そして、家の後始末をしていたところ手文庫から保険証書が出てきたので、それで事情を聞きに来たということでした。

突然お亡くなりになったということを聞いて、私もびっくりしましたが、とにかく保険金の受け取りについて早速手配しました。

それからしばらくして、武田さんから余市の方にいらして下さい、という案内が私のところにありましたので、四十九日のお参りをかねて出かけました。

大きな仏壇の前でお参りを済ませたら、「どうぞこちらへ」と、別室に案内されましたが、そこも立派な部屋で、テーブルには豪華な料理が用意されておりました。

なんでも、今年はリンゴの作が悪いところへ台風の被害があり、困っていたところに保険金が下り大変助かりました、というお話でした。

私も保険の仕事をしていて、こんなにも喜んでもらえて本当に良かったと、自分の仕事にひとり感激しました。

※ 願雄寺初代住職となった石上皆應の辛酸と努力に、浄土宗大本山増上寺からは、「北海道における浄土宗発興の上からも賞賛すべき奇瑞（きずい＝めでたいことの前兆）なり」と、称揚された。

『そば喰い地蔵』の安置されている薬師堂は昭和八年十一月に落成し、稚児行列が行われて賑やかに落成を祝った。

なお『そば喰い地蔵』の伝説は、「ふるさとの民話」（偕成社）・「北海道昔ばなし」（札幌・中西出版）など多くの出版物でも紹介されている。

＊渡船（渡し船）＝古平川に橋が架けられる前はみな渡船を利用していた。明治二十年代になり、川に杭を打ち込み板を渡して仮橋を作ったが、洪水になると橋板を取りはずしていた。

明治三十八年一月に念願の橋が完成したが、馬車がようやく通れる幅しかなかったので橋の中ほどに退避所が作られた。

橋の完成により渡船は廃止になったが、そのときの料金は大人二銭、子ども一銭であった。このころは沢江村の竹浪定市が渡し守をしていたが、町から給料が支給されていた。

古平川に仮橋が架かったことから、明治二十四年、沢江分教場は閉校になり古平小学校に統合された。

＜おことわり＞ 資料が整わなかったので、[illegible]を次の[illegible]と順序を入れ代えました。

断章小説【ふるさと遥か】第22編

広島に捧げる

吉川義雄

一九四五年八月六日。テニヤン島から飛び立った原爆搭載のノラゲイ機。ウィリアム・D・パーソンズ海軍大佐が、自らの手で原爆を史上初めて投下した翌日、彼が父親に書いた手紙が残っている。（八年後に死亡）

「…閃光。（中略）広島は、すでに二万フィートの高さに舞い上がった雲の下に横たわっていました。その雲の下部は、黒い埃（ほこり）が沸騰（ふっとう）しているように見え、市の全域を覆っていました。…」

前年、一九四四年四月（昭和八年）。吉野と平山のふたりが、霞ケ浦海軍航空隊から転属がかない、四国の松山航空隊までの列車の旅を楽しんでいた。

美しい春の旅であった。瀬戸内海の島々は淡紅の桃の花盛りであり、眺めにあきることは無かった。

緑のまち広島。街の中に大きな水路があり、両側には樹齢を重ねてこの街の歴史を見てきたような街路樹が、新緑の葉裏を返して風と遊んでいた。

戦争という愚かな行為を、人間がやらない限り、自然の営みはいつでも美しい。

松山航空隊の吉野たちの上官は、広島の話となるとがぜん目を細めて喜ぶ。そのわけはすぐに分かった。彼の新妻は広島出身で、今もそのまちの実家で留守番をしているという。

松山在勤中、近いせいもあり彼の奥さんは何度も隊に面会に来た。吉野も平山も上官に呼ばれて、面会所で奥さんを紹介された。二人は驚きを隠すことなく目を見張った。

蟇（がま）と、かげであだ名がついている上官は気の毒な程の醜男（ぶおとこ）であり、これは・と思う程の美女が彼の妻であった。

「いつも主人がお世話になっています。これからもよろしくお願いします…。」

戦時中だから、質素な和服にモンペをつけてはいたが、清楚な人となりが偉ぶることのない言動となり、化粧をしているとは思えぬ笑顔が、心に永く染み込むような美しさであった。挨拶を終えてから、彼ら二人は顔を見合わせて溜め息をつた。

一九四六年三月（昭二年）吉野は松山航空隊で別れたままの平山のその後を案じながら、台湾基地から復員して来た。

吉野と行動を共にした、先遣隊員の大多数は戦死していた。古びた輸送船がようやく復員船として配船され、船体をギシギシきしませながら、十日もかかって瀬戸内海にたどり着いた。

毎日のように死と対決していた戦火の日々が去っても、先々何が待っているのか皆目見当もつかぬ、哀れな祖国への帰還ではあったが、生きていた喜びは大きかった。

吉野の列車は、大竹港から北海道までの長い道のりを走り出した。入港したとき降っていたみぞれのせいか、遠い山々の雪の白さが目に染みた。

広島。二十世紀最後の「無惨」の代名詞となったこの街は、吉野の視界からも、たった一度の通りすがりの思い出からも、今は完全に消えていた。

水が熱で沸騰するのは百度である。広島上空で千度を超える閃光が輝き、熱波が瞬時にして広島平野の全域を沸騰させたのだ。

半年以上経った今も異様な静まりの中に、動く生命の姿は無い。明日から四月というのに、花も無ければ緑も無いのだ。駅跡の臨時停車場に、降りる者も乗る者も無い。

死んだ街に陽光だけが降りそそぎ、列車がガタンと動き出した。誰かが突然、「あったァ」と絶叫した。一叢（ひとむら）の青い草を発見したのだ。歓声が車内を走った。

（この稿終わり）

短歌

古平町岬短歌会詠草

氷点下の海に入りて着ぶくれの男らは鎌で若布とり居る　竹内コト

冬の間を留守にせし我が家気にかかり和む陽気に見に出かけたり　榊佳代

冬のまを寿都町にゐし五日間海鳴りもわが家に聞きたるに似て　池田テル

雪の上に影置く桜の枝々に冬芽は育つ光を浴びて　東美知

凍て去らぬままに弥生も半ばとなり彼岸参りの知らせが届く　鈴木時子

久々に映画音楽独り聞く束の間の青春よみがへり来る　田中香苗

久びさに晴れたるひと日向かひ家の庇見えきぬ雪嵩減りて　丹後初江

海に向く南の窓に冬日差し置く鉢の花アマリリス咲く　堀典子

啓蟄を十日過ぎたる玄関のマットのへりをわらぢ虫這う　奥山きよみ

老いを往く二人と思ふ忘れ物の在処うろうろ探す仕草は　山口スヱ

俳句

古平ホトトギス会

古平に群来村残し鰊来ず　斉藤波留

雪解風伏せし一位の立ち初めぬ　山口悦子

アマリリス日輪に向け伸びにけり　越野敏雄

筍の宅配便の段ボール　大和田絵伊

百余年変らぬ老舗桜餅　福井幸平

人恋ふる如く白鳥近かずけり　関口勝志

入社式礼儀正しき茶髪の子　よしざきり

牡丹雪舞い散るまでの命かなて　仲谷比呂古

虎落笛磯より沖へ波眩む　越野清治

地下街の売り娘マネキン衣更え　室谷弘子

引越の新居で夫婦年迎へ　岩瀬みのる

川柳

日の本の首のすげ替え神憂う　石井愛子

何時見ても結婚パーティー微笑まし

光りさす春が日射しに顔を出す